

会議 (The Second World Assembly on Aging)」が開催された。この会議は百数十ヶ国を超える国連加盟国が参加した政府間会議であったが、その会議の直前に、同じくスペインのヴァレンシアで500人近くの高齢者問題の専門家によるヴァレンシア・フォーラムが開催され、またマドリードではNGOフォーラムが開催され116ヶ国から約3,500人が参加した。両フォーラムの議論を集約した文書は国連事務局に提出され、世界会議の際の検討材料とされた。

国連は第1回の高齢者問題世界会議を1982年にオーストリアのウィーンで開催し、20年間の「高齢者問題に関する国際行動計画 (International Plan of Action on Aging)」を採択している。今回の第2回会議は、この行動計画をレビューし、新たな行動計画を採択することを目的とした。会議は、国連事務総長、スペイン国王妃、UNFPA 事務局長などの演説で始まり、総会において各国代表、各国連機関代表によるそれぞれの高齢者問題に関する活動成果の報告、提言が続く一方、ワーキング・グループにおいて「2002年高齢者問題に関する国際行動計画 (IPAA2002)」ならびに「(高齢者問題に関する) 政治宣言」についてパラグラフ毎の綿密な討議が行われ、両者とも最終日の総会において満場一致で採択された。なお、総会、ワーキング・グループと平行して、スペイン政府は「ダイアログ2020」と題するサイド・イベントの場を設定し、そこで国連専門機関、国際的NGO、スペイン政府などの独自企画により、高齢化・高齢者問題に関する様々なテーマのシンポジウムが会議開催中連続的に開催され、各国の参加者がこの問題についての理解を深める格好の機会を提供した。

日本からは大坪正彦内閣府審議官を首席代表とし、内閣府、厚労省、外務省からの総勢11名からなる政府代表団が参加した (筆者は副代表の一人)。ヴァレンシア・フォーラムには前田大作ルーテル学院大学大学院教授が参加し、NGOの会議には日本から100名ほどの参加があった。(阿藤 誠記)

アメリカ人口学会2002年大会

アメリカ人口学会 (Population Association of America) の2002年大会は、5月9日から11日までジョージア州アトランタで開催され、抄録集によれば152の口頭発表セッションと6つのポスターセッションが持たれた。また大会2日目には会長講演があり、Marta Tienda 会長 (プリンストン大学) が “Demography and the social contract” と題して講演した。後日発表された大会参加者数は1,558名に上る (PAA 会員数2,774名の56%に相当) という盛況であった。

本研究所からは佐藤龍三郎、小松隆一、岩澤美帆ならびに米国滞在中の金子隆一が参加した。佐藤はセッション139「先進諸国の思春期リプロダクティブ・ヘルス」で “Adolescent reproductive health in Japan: Demographic and policy dimensions” と題する発表をおこなった。岩澤はセッション137「先進諸国における意図しない出生 (unintended fertility)」で “Estimation of unintended fertility in Japan” と題して発表した。小松は日本大学の齋藤安彦助教授と共にポスターセッション4「健康と死亡率」で “Death, disabilities, and marriage: Marital status specific health expectancy in Japan” と題する発表をおこなった。いずれも多くの聴衆があり活発な議論が交わされた。本大会について個人的感想を述べれば、全体のごく一部を垣間見たに過ぎないが、主題、接近方法ともに多彩なことが印象的であり、また日本人口学会に比べ、問題把握・解決をめざす現実志向 (あるいは政策志向) の発表がより多くみられるように思えた。(佐藤龍三郎記)